

書道家

# 武田 双雲さん



## 情報に追われる現代だからこそ「手書き」する時間が心を整えます

従来の書にとらわれない、自由で躍動的な作品の数々が

映画やドラマの題字、ロゴなどでも広く知られる書道家・武田双雲さん。パソコンやスマホの普及で文字を書く機会が減った今だからこそ、手書きの愉しみや、「書」の魅力についてお話いただきました。

**手で文字を書くことは決して飽きない愉しみ**

僕は非常に飽きっぽいんです。何でも迷わずにパッとやめてしまいます。陶芸や音楽ライブ配信も数年で飽きましたし、若い頃に勤めた企業も思い立った途端に退職しました。そんな僕が3歳から始めて、一度もやめたいと思わなかった唯一のものが「書」です。文字を書くって面白いんですよ。一画目、二画目……といくつかの線が重なり合っているだけなのに、そのバランスでひとつの形になります。バランスが崩れても、また別の魅力が現れたりもします。そこでは思考は使っていません。感覚だけです。

筆を使わず、紙とペンだけでも良いんです。僕は、裏が白いチラシなどがあればすぐに何かを書いていきます。「いろはに」とか、ほとんど意味のない

**スピード重視の時代だからこそ非効率な時間を愉しむ**

スマホの登場によって、膨大な量の情報が生活の中に浸透しています。人とのやりとりも短い文章やスタンプを送れば瞬時に済んでしまいます。一方、手書きには時間がかかりま

とりが書く文字に、こう書くのが正しいというものはありません。お手本を疑い、クリエイティブかつフレキシブルに、気持ちよく書けば良いんです。

**上手下手にとらわれず自由に書くことで個性が出る**

自分は字が下手だと気にする人はとても多いですね。けれど、文字って何のためにあるのでしょうか。上手か下手かは重要なことですか？

例えばアメリカ人などは字の上手下手など一切考えません。読めれば問題ない、という感覚ですね。日本人の場合、理想的な字との違いを考えてしまうのでしょうか。いわゆる「きれいな字」を学ぶなら、ペン字の教材などいろいろあります。けれどもそこで身につくのは、上手くても個性のない字です。

昔から「書は人なり」と言うように、字は人柄まで感じさせるはずのもの。もちろんこれは、字が上手い＝良い人という意味ではありません。自分らしい字を書いてください。上達を目指しては際限がありません。理想とのギャップなど気にかけず、ご自身でこそその文字を書くことを通して、「今を生きている時間」を味わって欲しいのです。

筆の持ち方などに慣れないという人も多いと思います。でもこれも自由です。中国では持ち方が異なりますし、

す。あえてそうした非効率を選ぶことが、この激しい情報スピードに揉まれる現代社会で、ひとつの癒やしになるのではと思います。

ボールペンや万年筆で、一画一画をゆっくり書くのもいいでしょう。紙の質感やペンの感触、文字の形などを味わううちに思考も穏やかになり、せわしかった心が整っていきます。手で書くとは体を動かすこと。肉筆と言うくらい生々しい行為です。だから気持ちにも作用するのです。

もっと非効率を愉しむなら、筆で書いてみることをおすすめします。書道は墨を磨るところから始まります。香りや磨り音を愉しんだり、少しずつ色が濃くなる様子を確かめたりすることが、先へ先へと生き急ぐ心を、今に

戻してくれます。そして墨を筆に含ませ、1本の線を書いてみてください。ペンと筆の違いは、言わば「フニャフニャ感」。ペンは平面的な2次元の動きですが、筆は縦方向の立体的な動きが加わった3次元。複雑さが格段に増します。線1本にも筆感や毛の流れ、墨の香りなどアナログの魅力が立ち現れ、五感を深く刺激します。その複雑さを愉しみ、自由に書くのは面白いですよ。お手本通りを目的に頑張るのはちっとも愉快ではないですから。

主宰していた書道教室でも、僕は「どんな字もお手本ではなく、ひとつの例」と言っていました。もちろん古今の有名な書をその通りに真似る臨書というやり方もありますが、それは発表会などを目指す場合のこと。一人ひと

上段／手にしている作品は板に書いたもの。手すりや壁にも多くの書が。下段／墨を磨る時に使う水差しのひとつ。江戸時代のもので、2つの雲(=双雲)が七宝で描かれている。



### Souun Takeda

1975年熊本生まれ。東京理科大学卒業後、NTTに就職。約3年後に書道家として独立。NHK大河ドラマ「天地人」や世界遺産「平泉」など、数々の題字を手掛ける。ベストセラーの「ポジティブの教科書」(主婦の友社)をはじめ、著書は60冊を超える。日本各地や海外でも個展を開催し、独自の創作活動を展開中。10月には高松三越にて、11月には阪急うめだ本店にて個展開催を予定している。